



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	心のバリアフリーを目指した活動の意義：札幌市むくどり公園とむくどりホーム・ふれあいの会の事例を通して
Author(s)	柴川, 明子; Akiko SHIBAKAWA
Citation	社会教育研究, 21, 67-80
Issue Date	2003-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28552
Type	departmental bulletin paper
File Information	21_P67-80.pdf



心のバリアフリーを目指した活動の意義

～札幌市むくどり公園とむくどりホーム・ふれあいの会の事例を通して～

柴川明子

はじめに

2003年1月5日の読売新聞に「全障害児に『普通学級籍』埼玉県“二重学籍”容認2004年度にも実施」という見出しで、ユネスコが推進するインクルージョン教育の理念を取り入れた取り組みにより、障害児ができる限り普通学級や地域社会で過ごし、互いの個性を尊重しあう意識が高まることが期待されていると報じられた。また同紙に宮崎学の「差別はなくせない。闘いのなかで目の前にある差別をつぶす。差別をなくす運動とは、それ以外のものではありません。([『近代の奈落』⁽¹⁾])」の言葉にも目が留まった。

ある親しい重度重複障がい的高等養護学校生の母親は、我が子がずっと地域から分離された状況で、通園施設や特殊学校に通ってきた10数年を振り返り、「算数や漢字を覚えなくてよいのです。人と一緒にいるのが好きな我が子は地域の学校に通って、友達から一杯声をかけてもらって生活させたかった。近所の子どもや大人からその時々成長を見守ってほしかった。この思いをどこへ持っていったら受け止めて何か具体的にしてもらえるのでしょうか。どこにもありません。」と語っていた。その時筆者は只、耳を傾けることしかできなかった。

また、先日出会ったある四肢障がいの生後6か月男児の母親は、「五体満足と五体不満足との間にできる壁は一体どんな意味があるのですか。」と、涙ながらに訴えていた。片方の手の親指以外の指が欠損していることに対して、出産直後から周囲の人々が示す奇異な視線と、保育園申請についての行政機関の対応に既に心の傷をかなり多く受けていた。

ふれあいを求め、障がい理解を求めて必死にその解決を探している障がい児の親に対して、先の二つの新聞記事は大きな意味を持つものと考えられる。まさに、現実に出会う人と人との関係の中で具体的に個性を尊重し合い、互いの違いを認め合い、互いが成長し合い、差別や偏見をなくす実践の積み重ねを継続していくことが必要であると感じる。実践を進める上では、さまざまな困難にぶつかるが、直面する一つ一つの具体的な課題に向き合っていくことが大切であろう。

筆者は高校時代に全盲女性と友達になり、その後実習先の東京の盲学校で、遠方から通学していた幼稚部生の親から「地域の子どもたちと遊ぶチャンスがない」ことを聞いて以来、障がいのある子もない子も共に触れ合い遊ぶ場を提供したいという夢を持った。その後幼稚園教諭、育児、PTA活動、再学習を経て、1992年(筆者56歳)から、視覚障がい児・者への理解と支援をテーマにした

『ひかり女性学級』⁽²⁾の開級と、『視覚障がい児親子相談ルーム・ハブティック』⁽³⁾の開設をした。また、カナダのピーターボロ市の子育て家庭支援センターの視察⁽⁴⁾により、乳幼児親子のためのドロップインの役割を見聞した。そこから、障がい児・者と共にふれあうための場としての建物と庭との具体的なイメージをふくらませていった。

48年前に筆者が共にふれあう場を提供したいという夢を抱いた頃は、バリアフリーという言葉は使われていなかった。しかし不思議な経過を経て、バリアフリーを前面に出した公園が造られ、心のバリアフリーを目指したふれあいの会を発足することができたのである。

本稿では、公的施設の公園と連動して、私設の建物で展開してきたふれあいの会の活動はどんな役割を果たしてきたのかについて、実践当事者自身による実践報告をし、この活動の意義を考察したい。

I. バリアフリー公園開園までの経緯

1. 藤野むくどり公園設計計画完成まで

(1) 藤野むくどり公園の移転先予定地の決定

旧藤野むくどり公園が河川用地として取り壊されることになり、その移転先として、筆者宅の向かいの夫の土地が候補に上がり、決定した。その時夫は「妻は障がいのある子とない子が共に触れ合い遊ぶ場をそこに造りたいと、夢のような話をしていた。」と、札幌市公園計画課の方に話したとのことであった。その後、行政側から筆者の意見が求められた。

当時、南区土木部勤務のS氏はむくどり公園開園5周年記念誌⁽⁵⁾に、「造成プランを自分ながらに頭の中で模索、思案していたところ、用地取得に携わった公園計画課の担当者から『この用地の所有者であったご夫妻が視覚障がい者に関し熱心に活動されており、視覚障がい児にも配慮した公園を希望されている』という話を聞いた。」、「公園を創るために集まった多くの方々との交流が素晴らしかった。」と書いている。

その頃筆者は現在むくどり公園が設置されている土地に、カナダで見えてきた一般的な民家を建て、その周りを庭にしてふれあいの場にすることを想像していたが、その代わりに札幌市によるバリアフリー公園が造られることになった。そしてその後は、その公園の威力なしにふれあいの会の活動は考えられないものになっていった。

(2) ワークショップ前までの障がい児の親からの聞き取り

筆者のその時のボランティア活動の場であった視覚障がい児親子相談ルーム・ハブティック（前掲注3）と盲児グループ⁽⁶⁾に参加していた視覚障がい児の親から公園について各々の思いを語ってもらった。そこから障がい児の親は公園について様々な思いを持っていたことが分かった。施設面

では「既存のブランコ、滑り台等の遊具は障がい児には遊べない。園路は車いすで通れない。」「トイレや休憩場所等が障がい児・者にとって使いにくい。」等であった。人との関わりの面では「近所の子ども達と沢山遊ばせたいと願って、児童公園の真向かいに引っ越し、公園に遊びに連れて行ったが、『あの子の目、変だ！』『滑り台に登るのがおそい！』と苛められることが重なって、遂には他の子どもが遊びに来ない風の強い日に遊びに行った。」「『どうしてこんなに重い障がいの子どもを公園につれてくるのだ！』と言われた。」「公園で他の子ども達に近づいていくと、そこに居た子どもや大人にパッと逃げられてしまった。」「近い公園がとても遠い場所だった。障がい児をもつ親は車で離れた公園に行く。」等の話から障がい児の親の悲しさ、悔しさに筆者は衝撃を受け、障がい理解の輪の広がりが必要を痛感した。

また、設計コンサルタントと公園計画課の職員も、公園用地の決定後、同じく視覚障がい児親子相談ルーム・ハプティックや盲児グループのボランティア活動の場を見学し、障がい児の親や教師の話を熱心に聞き取ることもあった。そこから、以下の「視覚障がい児親子の“こんなのがあったらいいな！”希望メモ」が作成されていた。

- 「・椅子のついたブランコ　・音声のでる仕掛け　・ボールプール　・築山　・水遊び場
- ・軽走用ガイドレール付柵　・フォークダンスができる広場　・マウントスライダー
- ・木製コンビネーション遊具　・色々な表情の人形や動物の彫像　・立体地図
- ・危険を1，2歩手前で足で感知できる配慮　・色彩は原色系を用いはっきりさせる」

その他に行政側によりバリアフリー公園の先行例についての調査も行われた。いずれも大きな施設ではあるが、デンマークにおける福祉に配慮した公園と、日本初のバリアフリーリゾート施設である「長崎でてこいらんど」のビデオ撮影及びイギリスの障がい児のための冒険遊び場、北九州市の福祉公園の資料も取り寄せられていた。

(3) ワークショップ（バリアフリー公園設計のための相談会）の開催

この時期、札幌市の公園計画課では「個性あふれる公園整備事業と、ワークショップ手法」に取り組んでいたことと、職員の熱意により、新しい藤野むくどり公園をバリアフリー公園に造成するために、住民参加のワークショップ形式で設計計画が進められた。

①ワークショップ参加者の募集

行政側は町内会、子ども会から参加者を募り、筆者は障がい児親子、障がい児教育関係者、ひかり女性学級生から参加者を募った。町内会・子ども会 25 名、障がい児・者関係他 21 名、行政・設計コンサルタント関係 11 名の計 57 名でワークショップが発足した。

②期間 1995年4月から8月までの5回月1回2時間ずつ

③場所 南区藤野第一町内会館

④内容

- 1 回目 開会式とオリエンテーション…約9名ずつの6グループが編成され、グループ名や会の名称も決まり、全員が自己紹介と公園への熱い夢を語り合った。
- 2 回目 やさしい公園ってなんだろう…初めて車椅子体験や目隠しして歩く体験をした人も多く、実体験から障がい者への配慮が必要であることを感じとった。それを各グループが「気づいたこと・感じたことシート」にまとめ、発表し合い、公園づくりのヒントが出やすくなったと思われる。
- 3 回目 公園のイメージを話し合う…公園予定地を見学し、そこにどんな遊具を設置したいかを考えた。広場と遊具の遊び場の割合を模造紙に書いていった。また既成概念を破って、例えば「ブランコ」という名詞（“ものの名前”）に対して、どんな形容詞を当てはめればよいか考えた。さらにその形容を「利用者の立場からみた形容表現（例：ゆったりした）」と「製作者の立場からみた形容表現（例：幅広い）」とに分け、前者を“やさしいことば”、後者を“かたちことば”と称してグループ毎に表にまとめた。これによって、新しい設備のイメージが浮かび上がってくるようになった。
- 4 回目 みんなで模型を作ってみよう…遊具の配置の仕方を考え、6グループが一つずつの大きな紙に立体的な起こし絵模型を作成し、皆の思いをそこに投入した。
- 5 回目 完成予想模型のお披露目…起こし絵模型からの33種類の要望のうち24種類の施設が盛り込まれた予想完成模型が、設計コンサルタントにより完成した。

⑤終了後の行政側の意識変化

ワークショップ終了後に、公園計画課職員H氏が筆者宛に次の内容の手紙を寄せた。「今回のワークショップを通じて、行政マンでありながら福祉行政には全く無頓着であった自分をはじめスタッフ一同大変勉強になったと思う。滑り台一つにしても、ただ幅が広ければよいというわけではなく、親子が一緒に滑ったり、横揺れを適度に納めるための程良い幅がある事を直接障がい児の母親から聞いて、生の声ほどいいアドバイスはないと痛感した。ディーテールな配慮は専門家だけで見込み判断するのではなく、利用者の生の声や模擬実験を通じて常に改良を加えながら進めていく必要を痛感した。」このようなことは貴重な意識変化であると思われる。

予想模型が完成しても、工費の都合で工事の着工は翌年行われることになった。

2. 設計計画完成から公園開園式まで

(1) 自宅開放への準備

公園予定地が決定した時、筆者は公園真向かいの自宅をふれあいの拠点として開放する準備を開始した。公園は人と人との素敵な出会いの場所であるが、ふれあいの継続のためには、ふれあいの拠点が必要であると確信し、自宅開放が最も立地条件がよく、時機にかなっていると思い至った。そして不十分ながら最善を尽くして、下記のように改築した。

- 「・玄関の階段をスロープに ・室内トイレの横の物入れを壊してトイレを広く
- ・ベランダを部屋の拡張に ・屋内物置と押入れを壊して部屋を広く
- ・ガレージを屋外トイレに ・外壁はサイディングに ・窓枠はサッシに
- ・翌年には隣家を買って、公園とホームに車で来る人のための私設駐車場として提供」

(2) 公園開園以前 11 カ月間のむくどりホーム・ふれあいの会発足

公園予定地の決定後、筆者はひかり女性学級生にふれあいの拠点づくりについて、何度も相談した。その結果、①ひかり女性学級の地域に向けた活動として位置づけようとする積極的な賛成意見、②障がいのある子どもと共にふれあうというような重大責任を伴う活動は安易にすべきではないという強い反対意見、③賛成はするけれど自分自身は家庭の事情と自分の体力の限界から活動には関われないという傍観的意見、④今まで通り自分たちの学習活動として内部で楽しくひかり女性学級を続けていこうという現状維持の意見などであった。最終的には学級長である筆者は、半ば強引に①の賛成意見を通した。しかし、女性学級独自の活動として、布の絵本づくり、視覚障がい者とのフォークダンス交流会、学級内親睦バザーを継続することにし、その後も続けている。

このような経過を経ながら、ひかり女性学級生6名が発起人となって、公園設計のワークショップ終了の翌月から、月1回のむくどりホーム・ふれあいの会を発足した。「多くの人と知り合いになって公園の開園を待ちましょう！」という目的で、ビデオ視聴、点字の説明、視覚障がい者から手芸をおしえてもらう、映画会、クリスマス会、新年会、公園工事の方々へのお礼のクッキーづくり、ワイルドフラワーの種まき、巣箱づくり等、楽しい集いの開催と共に公園設計の具体的検討が行われた。点字案内板、ふらんこ、手すりの高さ、花壇、噴水、園路、滑り台の階段等につき、障がい者や障がい児の親を含む参加者の声が行政側と設計コンサルタントに聞き取られ、実際の工事に反映された。

(3) 告知と質問紙調査

むくどり公園の開園とむくどりホーム・ふれあいの会の告知、及び質問紙調査を公園の開園1か月前に実施した。第一町内会各戸、近隣小学校、幼稚園、障がい児の通園施設、特殊学校、公園設計のためのワークショップ参加者、専門学校などへ1200通を配付し、190通の返信葉書を受け取った。ボランティアの申し出は、子どもと遊ぶ49名、布の絵本作りなど27名、講習会・交流会・企画18名、公園の清掃・草取り27名であった。実際に活動に参加していただけた人数は少なかったが、このように多くの方が背後で応援して下さっていることを実感し、大きな励みになった。また、以下のような自由記述もあった。

「・むくどり公園はきっと初めて会った人にも、笑顔で話しかけて、すぐに友達になってしまうような、そんな温かい公園、人と人とのふれあいの地になることと思います。

・むくどりホーム・ふれあいの会の活動の試みに感動しました。多くの子どもたちが喜んで利用されることに期待しております。

・自分らしくいられる所に人は集まると思うのです。

・一人暮らしのお年寄りの方々も、日向ぼっこしがてら“むくどり公園”へ行くのが日課となれば、さびしくなくなるかも知れませんね。」

このような多くの期待の中で開園式を迎えることになった。

(4) 開園式当日及び設置された遊具

藤野第一町内会主催により、170名が参加した開園式では、挨拶、テープカット、遊具紹介、お礼の言葉、クラリネットの友情演奏、懇親の会、車いす体験、目隠し歩行体験などが行われた。むくどり公園に設置された設備は以下のものである。

「・介助者も一緒にすべれる幅広のローラー滑り台 ・車いすでも使えるテーブル式砂場
・シートベルト付きのぶらんこ ・香り豊かなハーブガーデン ・クッション性の高いゴムチップの園路 ・ゆったりした芝生 ・噴水 ・点字の総合案内版 ・手すり ・藤棚
・サークルベンチ ・マット ・吊り橋 ・ステンレススライダー ・幅広ブランコ」

当日、筆者は報道陣の取材を振り切って、ただただ子どもたちと遊びたくて、シートベルト付きブランコやテーブル式砂場に走って行ったあの感動が忘れられない。

(5) 公園開園式後に寄せられた感想

公園計画のワークショップに参加していた障がい児の母親から次のファックスが筆者に届いた。

「すばらしい公園ですね。実はずっと心配していた事があったのです。障がい者専用に重点を置くと、どうしても過保護になりやすくなるので、健常者には、面白くないのではないかと、使うのは健常者の方が多いのだから。しかし開園式の後の子ども達を見て安心しました。健常児はそれなりに遊び方を発見し、楽しむ事を知っているんですね。障がい者用は障がい者しか使えないのではなく、一緒に使うことができるのだと改めて知らされました。この公園造りに参加でき、受け止めてもらえた様な、自信のようなものができました。」お子さん(当時養護学校5年生)I子さんがシートベルト付きのブランコにのってよろこぶ姿をみて、母親が「一人でのれた！」と歓声をあげていた情景を思い出し、バリアフリー公園の完成のよろこびが一層増した。

II. むくどり公園開園後のむくどりホーム・ふれあいの会の実践の特徴

1. ふれあいの会の目標・理念

活動を通して形成されてきた会の目標や理念を、ふれあいの会代表である筆者がむくどりホーム

だより⁽⁷⁾に書いた言葉から見ていく。

(1) 公園開園 20 日後

第 2 回相談会に集まった十数名の人々と考え合って「障がいに配慮しながら、お互いの健やかな成長を願いつつ、遊びと交流を通して憩いとふれあいの輪を広げる。」という目標を掲げた。

(2) 公園開園 1 年 10 か月後

「一番大切なことは互いに歩み寄り、互いに知り合い、心をふれ合わせる努力をすること。課題としては、親と一緒に来ない幼児への対応に苦慮していること、重度障がい児の抱き方講習が必要であること、自由に利用する場所での最低のマナーを心得る必要があること、ふれあいの会のために頑張りすぎて不平にならないよう決して無理をしないこと。」等と書いていて、具体的な人との関係の課題が見えてきている。

(3) 公園開園 2 年半後

「組織やボランティア体制がきちんと整っていないけれど、“また来てみおうかな〜”と書いていただければ、それが最高の喜びです。」と書き、種々の課題があっても、ここでの人と人とのふれあいを第一の目標にしようと、決意を新たにしている。

(4) 公園開園 6 年後

7 年間の活動(公園開園 6 年後)から得たふれあいの会の活動の目標と理念は、「むくどりホームは、障がいのある人もない人も赤ちゃんからお年寄りまで、だれもが気軽に立ち寄ることのできる友だちづくりの家です」ということである。これをむくどりホームだよりの扉に掲げ続け、このことをずっと目指してきた。

ふれあいの会とは人が集まる場である。そこには、対人関係の摩擦が生じ、関係が揺らぎ、崩れ、建て直し等の努力が続けられてきた。まさにふれあいの会は生き物である。

参加者一人ひとりが大切な個人として認められ、自己実現することによって初めて、他人とのふれあいが成立するようになる。このような経過を経て次の理念が生まれた。

- ①心のバリアフリーが少しずつ実現していくことを目指している。
- ②お互いに人を軽んじたり、支配したりせず、「今日あなたと出会えて嬉しいね。」
「またお会いしましょうね。」と思い合い、友だちづくりをする。
- ③参加者一人ひとりが、自分の居場所を得る。
- ④やりたいことを自発的にやる。お互いにそれを認める。

2. むくどりホーム・ふれあいの会の活動内容

公園開園後の週2回のむくどりホーム・ふれあいの会の通常の参加者は、10数名～80名以上等ばらつきがあるが平均すると1回約40名である。自由参加なので予測できないが、少ない日も多い日も各々の楽しみ方がある。開始以来参加者0で中止した日はなかった。

(1) 行事

むくどりホーム・ふれあいの会が主催するが、公園とホームを用いて、多くの方々の協力によって毎年続けられている。公園開園記念会には250名位の参加がある。

- ①5月の鯉のぼり会 寄付された鯉のぼり20尾が公園にたなびき、音楽やゲームをする。
- ②8月の公園開園記念会 町内会の年間予定にも入り、外部の協力・参加が多い。よさこいソーラン、和太鼓、手遊び、手話で歌う、手引きの実習、車いす体験、バザー等が行われる。
- ③12月のクリスマス会 クリスマスの話、音楽、ゲーム、キャンドルサービス等がある。
- ④2月の雪遊び会 中学生その他の協力で雪の公園で存分に遊ぶ。
- ⑤音楽会 ギター、オカリナ、マンドリン、琴、合唱などによる音楽会が適宜開催される。

(2) 教室

概ね月1回の教室はボランティアの方々による指導で開催されている。布の絵本づくりはひかり女性学級から継続され、他は新たに立ち上げたもので子どもも大人も参加する。

- ①布の絵本づくり 材料は布の絵本の子ども図書館“ふきのとう文庫”で購入し、7人位の主婦が集まって手縫いで製作し、完成した絵本はむくどりホーム内で使用している。
- ②点字教室 盲学校教諭、点訳ボランティア、盲導犬と一緒に視覚障がい者等の指導で、初めて参加する人は点字体験をし、継続して参加している人は絵本を点訳している。
- ③手話教室 参加者により始まり、保健センターの世代間交流事業としての教室を経て、活動の一つに位置づいている。公園開園記念会やクリスマス会では、むくどりホームの手話ボランティアの方が挨拶その他を通訳し、手話つきの歌を皆で歌う。
- ④アンデルセン手芸教室 病後の高齢者が、自分のリハビリの体験を活かして教えている。チラシ紙を用いた手芸で、年齢や経験回数によって、やさしいものから難しいものを作っていく。
- ⑤男性料理教室 料理の先生がむくどりホームに役立ちたいと始めた、主として高齢者5名位の教室である。公園周囲や町内会役員への感謝会には、この教室の手料理が振る舞われる。教室参加者は、むくどりホームのちょっとした修理等を気軽にやってくれる。
- ⑥手作り玩具 参加者の親の指導により、牛乳パックでつくる1オクターブの笛や箱等を通所施設の人でも喜んで参加して作っている。
- ⑦中・高生の茶話会 手作りお菓子を参加者にも提供し、自分たちの話し合いもする。不登校の

中学生，特殊学級の中学生の参加もある。

⑧陶芸教室 釜を持っている近隣の人が，むくどりホームの参加者にほっとする時間を提供したいと願って，その人の家で週2回開催している。毎年，展示会も行われている。

⑨手芸教室 障がい児の衣服，水着の製作から始まり，オリジナルの手芸を製作している。フェルトの鯉のぼり，干支の動物，クリスマスの飾り，母の日・父の日のカード，髪かざり，プローチ，ふくろうの置物，ピエロ等，先生のアイデアが次々作品になり，作った子どもや大人は無料で持ち帰っている。

(3) 障がい理解のための学習会（講演会，むくどり学級等）

障がい理解のための講演会，障がい児の親の話聞く会，施設訪問，障がい理解の学び，ふれあいの会でのエピソードを纏める，障がい別マニュアルづくりなどに取り組んでいる。

(4) 広報活動

①むくどりホームだより（前掲注7）

むくどりホーム・ふれあいの会のニューズレターで現在3ヵ月に1回発行している。

②記念誌発行

むくどりホーム・ふれあいの会発足6周年(むくどり公園開園5周年)を迎えて記念誌を発行した。

(5) 長期休暇のプロジェクト

長期休暇の学生による子どもと遊ぶ活動（夏休み，冬休み各6日間ずつ）が開始され，高校生や大学生その他のボランティアによる子どもとの遊びが展開された。

(6) 公園管理

むくどり公園他1の清掃管理を町内会から再委託を受け，管理費を活動費に当てている。

(7) その他

①絵本・紙芝居の読み聞かせ ②ピアノに合わせて ③参加者で昼食をつくるお楽しみ会 ④障がい児の親の話合う会 ⑤ホーム内の掃除等が参加者によって自発的にされている。

3. 外部との関連

(1) 行政及び関連機関との関連

町内会，地域福祉サービス課子育て支援担当，保健センター，社会福祉協議会，共同募金会，土木センター，公園計画課，などの関連があり，種々の協力を受けている。2003年2月～3月には冬

の公園で楽しく遊ぶ実験として北海道開発技術センターによる企画が実施された。

(2) 学校との関連

①校外学習，社会福祉演習，研修，調査研究等

特殊学校・通園施設・通所施設の校外学習，高校・短大の社会福祉演習，児童会館職員，保育園の先生方の研修，大学生・大学院生の論文作成，の対象にむくどりホームが用いられることもある。

②小学生の総合学習体験から

3年前から，校区の藤の沢小学校の生徒が学年単位またはクラス単位で，総合学習の授業時間にむくどり公園とむくどりホームを訪れている。

(a)ある日のこと，他の小学校の特殊学級4年生の自閉症の子どもの母親が，「一番難しくてとても大切なボランティアって何だと思う？」と問いかけ，「障がいのある子と一緒に遊ぶことではないのかな」と話したとのことである。その日に初めて出会った自閉症児と何人かの小学生が握手し，自己紹介しあった。次に出会った時には，小学生が自閉症児に名前を呼んで駆け寄った。

(b)乳幼児親子とのふれあいや障がい者・障がい児の親の話当真眼差しで聞く小学生達は，ちょっとした人とのふれあいのきっかけで，積極的な活動を展開しようとしていく。

③高等養護学校生徒の母親からの手紙

養護学校の1クラスが郊外学習として訪れた後に，以下の内容の手紙が寄せられた。

「16年前，障がい児が生まれどん底にたたきつけられ，大手を振って外を歩けなかった。むくどりホームが側にあったらもっと早く立ち直って子どもの将来のことを考えられていたのではと感じた。障がい児の心の支えになって下さっていることに感謝する。でもどん底にいる時は，自ら出向くことが難しい。障がい児が生まれた家庭に，ホームの存在を知らせて，電話で誘ってもらおうと行きやすくなる。」このような要望を真摯に受けとめたい。

4. 参加者の様子

ふれあいの会の活動を開始してからの近所の子も達と障がい児家族の様子がどのように変化してきたかについて記述する。

(1) 近隣の子も達の様子

近隣の人々は勿論，遠方からの多くの人とも出会うことになっていった。また，近隣の子も達と親しくなり，子ども達の背後にある家族の様子が見えてきた。それまで，通りすがりに出会うだけだったが，公園やむくどりホームに遊びに来る子ども達は，皆大事なむくどりっ子として，筆者の心の中に位置づいてきた。

近隣の子も達は公園開園の翌日むくどりホームのノートに「要望（ごみ箱，砂場の所に階段が

ほしい)、心がけること(ゴミを捨てない、喧嘩をせずに仲良くする、遊具で遊ぶ時は順番を守る)」等と書いた。また、公園開園初期の自主的活動としては、10人以上の子ども達が雑巾を借りにきて雨の後の公園の滑り台を拭いたり、ゴミ拾い等をした。

その後、落書き、カッターで遊具の柱を彫る、喧嘩、砂を噴水に入れる、滑り台からマットに飛び下りる、他校の生徒同士が大喧嘩の後仲良くなる、手すりで乳幼児や高齢者の歩行練習、初めて出会う障がい児との戸惑いから自然なふれあいに発展する、異年齢間の遊び等、様々なドラマが展開されている。公園の出来事はむくどりホームに伝わってくる。

(2) 障がいのある子ども達と家族の参加

最初の2年程は遠方からの車椅子使用の重度障がい児や視覚障がい児の参加が多かったが、次第に自閉症その他の障がい児の参加が多くなってきた。以下は参加者の親の感想である。

①視覚障がい児の母(むくどりホームだよりから記念誌 p.158)

「自分の得意なことを、皆と共有できたら、うれしい。先日、子どもたちが体ごとぶつかりあって、活気があって、ワイワイにぎやかな楽しい時間を過ごした。白杖について質問されたり、答えたりということもあった。こういうこと、ひとつひとつが積み重なってだんだんお互いに近づいていき、わかり合えるのだろうかと思った。自然で、素直に関係が持てるのが、むくどりホームのすばらしさだと思った。」

このすばらしい交流は、盲学校中学部の男子生徒に小学1年生の女兒が「黒目あるの?どうやって歩くの?ご飯どうやって食べるの?」と質問したことがきっかけであった。その質問に対して、筆者と盲学校生の母親は一瞬戸惑ったが、すぐに筆者が緑内障についての説明、ご飯はみんなと同じように食べること、歩く時に白杖を使うのでその使い方を教えてもらおう、大好きなお相撲をみんなで作って見たらどうかと提案した。率直な質問はその後の交流の入口になった。不思議に思ったことを互いに質問し合える関係づくりの環境を整えることも大切な課題である。特に子どもの悪気のない率直な質問を大切にしたい。

②肢体不自由と視覚障がいのある子どもの母(むくどりホームだよりから記念誌 p.178)

「…今ではすっかり、重い障がいのある我が子を同伴できる大切な社交の場になっている。でも最初からそうであったわけではない。生まれつき脳性麻痺という障がいをもった我が子は成長とともに同年代の子ども達との能力の差がみるみるついてきた。…」

初めて健常児との接点を持つ機会を与えられたむくどりホームで、あらためて障がい児とそうでない子どもの差を思い知らされた。むくどりホームに来ると辛い思いをする。でも来るのをやめなかった。その理由は、ホームの方々がいつもあたたかく迎えてくれたからだ。…クリスマスのミニコンサートの時などは小さい子どもが、泣いている我が子に楽器を手渡そうとしてくれた。『そうか、みんな我が子の味方だったんだ。大きくなったら障がいを持った人の手助けになる人達なんだ。』と

いう思いが、その時ふと頭をよぎった。すると急に周りにいる子ども達がいとおしくなり、感謝の気持ちわいてきた。『ありがとう。みんないてくれてよかった!』と。』

この若い母親は逃げずに現実を受け止め、ここまで到達できたことを嬉しく思う。楽器を手渡そうとしてくれた幼児の小さな行動が、この母親の心を大きく変えたのだった。

③二人の自閉症児の母（むくどり公園開園5周年記念誌からp.49）

「他の公園にない『安心感』とか『自分を受け入れてくれる人達と一緒に時間をたくさん持ちたい』と通い、知り合いや友達がたくさんできた。我が子のことをわかってくれる子どもと一緒に遊んでくれるようになり、言葉も一語文から二語文、三語文になった。」

親子で諦めずに、来続けている中で、少しずつ状況が変わっていくことが感じられる。

III. ふれあいの会の意義についての考察

この試行錯誤の小さな活動から見えてきたものは、現代社会の縮図の一部のようであった。参加者の中には育児に疲れた親・祖父母、周囲の理解を求める障がい児・者や親、学校内で認められずに課題を抱えた小学生、特殊学級と普通学級との壁を取り除きたいと努力している障がい児の親、寄宿舎に入らずに通学可能な高等養護学校の設立を望んで署名運動をする親、子ども達とのふれあいを求めて集まる青年男女、総合学習で訪れて自分に何ができるかを考える小学生達等もいる。各々の立場でよい時間を過ごしたいと願っている。

登録なしで予約なしの自由参加、参加費無料のこの活動は、一回ずつの完結性があり、一回一回が真剣勝負である。その日出会った人と人との関係の中で、人が育ち、人の理解が生まれてくるのであろう。この出会いの積み重ねにこそ活動の意義があると思われる。

ある小学3年生の四肢障がい女兒の母親は筆者に次の手紙を寄せている。「いのちに関わる先端技術については先天性の障がいをもつ子の親の立場からしては、障がい＝生まれてはいけないものと感じてしまう。障がい児・者を可哀相だという発想の裏にある『優生思想』を変えていかなければならない。障がい児・者が尊重されて一生を送れる社会づくりが大切である。一律に型にはまった教育では本当の教育はできないのではないだろうか。自分を掘り下げて本当に大切な事は何なのか、自分を探す旅の良き先導者に子どもがなってくれています。それと地域に根ざした『むくどりホーム』が後おししてくれています。」

この母親が考えるように「本当に大切な事は何なのか」を互いの立場で日常的にも学び合いたい。それは、一斉に一律に学べるものではなく、気づいた人が具体的な体験を通して他の人に伝えていくという忍耐強い草の根的活動の要素があるように思われる。

また、障がい者を支援する姿勢については、上から見下げた哀れみの態度ではなく、共に今ここにいる仲間として自分の持っている力を必要に応じて用いていくという横の関係が大切である。こ

のようなごく自然なふれあいが、むくどりホーム・ふれあいの会にとって重要な意義があり、やはりお互いに相手から学び合う姿勢が必要となる。

さて、現在の公園計画課職員のJさんはマスコミや福祉関係者から、「次のむくどり公園はどこで」とか、「1区に1箇所むくどり公園を」と言われる中で、公園開園記念誌(p.30)に次のように書いている。「一律な基準に従って機械的に整備していく、という従来のお役所スタイルのやり方では実現しないのは明らかです。地域における人の輪づくり、様々な障がいをもつ人達と理解を深めることのできるふれあいの場づくりから、ゆっくり時間をかけて行っていかなければならないでしょう。むくどりホームだよりをいただく度に、そんな公園づくり、まちづくりを目指していかななくてはと、いつも考えさせられています。」

この言葉の意味は重要であると感じる。確かに人の輪が先に必要である。そして、人の輪ができたらすぐに行政的支援がなされれば、その活動が広がっていくものと思われる。

現在の活動は筆者の長年の夢の実現ではあるが、最初からバリアフリー公園とふれあいの拠点をセットに考えていたわけではなく、思いがけず、多くの方々の協力が結集されて人と人をつなぐ役割を担う活動になっていったと言えるだろうか。人々が共に育ち合い、居場所をつくり、人が人を誘って繋がりが大切にされる。そしていろいろな人がごちゃごちゃに居る意味の素晴らしさが其処にあるのだろう。バリアフリー公園とふれあいの拠点づくりは、やはり筆者の最も強調したい目標である。

この活動から得た仮説は、「バリアフリー公園とその横のふれあいの拠点で展開される“心のバリアフリーを目指したふれあい活動”が、今必要とされている様々な課題を統合して、課題解決の一助になる可能性があるのではないか」ということである。当会が札幌市福祉のまちづくり賞や、バリアフリー化推進功労者内閣官房長官表彰を受けたことは、この活動の中に心のバリアフリーに向けた小さな種まきの意義があったと理解したい。

おわりに

さて、むくどり学級で学び合い考え合ったことを基に、今、“むくどりホーム・ふれあいの会の今後について考える会”を立ち上げようとしている。そこでは、この7年間に築き上げられた人との繋がりを大切に、地域住民、学校、行政機関、関連機関、参加者が同じテーブルにつき、今後の心のバリアフリーを目指した福祉のまちづくりをどのように進めていったらよいかを考え合いたい。他地域で同じ志を持つ人とのネットワークづくりや啓蒙活動等の、今後成しうる可能性にも希望をもって取り組んでいきたいと願う。

むくどり公園やむくどりホームでの出会い、ふれあいは、参加者にとっては一つの通過点であろうし、一瞬の出来事として、忘れ去る人、嫌な思いを残す人、いい思い出を温める人等様々である

う。しかし、その僅かな瞬間が良くも悪くもその人の人生に大きな影響をもたらすこともあろう。それを思うと、このふれあいの会での一回一回の出会いを大切にしていきたい。それは誰もが当たり前前に認められ受け入れられ自分の居場所を見出すための作業でもある。重い課題が山積し、参加者によって刻々と変っていくふれあいの会であろうが、楽しみながらゆったりとこの活動を進めていきたい。

注記 本稿において、「障害」の「害」を「がい」とした（「碍」を用いる人もいる）。ある自閉症児の母親の「子どもたちに『害』があるのですか？」という問いを筆者は重く受けとめている。「そうでない」というせめてもの答として、その母親が使う「がい」を用いる。立ち止まって意識するきっかけとしたい。

注

- (1) 宮崎学『近代の奈落』, 解放出版社, 2002年, p 458
- (2) 1992年5月, 南区藤野に開級した。札幌市教育委員会社会教育課の委託学級として、「視覚障がい児・者への理解と支援」をテーマにした女性学級。開級条件は、社会・家庭をテーマに、15名以上の女性が年8回以上2時間以上の活動をし、報告書を毎月社会教育課に提出することであり、2年間は委託学級として年間38,000円の運営費を受け、その後は自主学級となる。ひかり女性学級の活動内容は、視覚障がい者に関するビデオ視聴、訪問(盲学校、盲老人ホーム)、布の絵本づくり、視覚障がい者との交流会(話し合い、合唱、フォークダンスによる)、読書会、親睦バザー、視覚障がい者の話を聞く、視覚障がい者を手引きする実習、手引きボランティア、ニュースレターやまとめの文集の発行等であった。
- (3) 1992年7月, 豊平区に開設した。視覚障がい児の個別指導、親の個別相談、親同士の交流、専門学校生との交流等を行った。盲児グループの数名も参加していた。
- (4) 1992年10月小出まみ氏をリーダーとした12名のカナダ訪問では、乳幼児関係、障がい児・者関係、高齢者関係の3グループに分かれて施設や家庭を訪問した。この視察旅行記が、小出まみ他編著『サラダボウルの国カナダ』, ひとりなる書房, 1994年として出版された。
- (5) 2001年8月に、「心のバリアフリーをめざして むくどりホーム・ふれあいの会のあゆみ 藤野むくどり公園開園5周年記念誌」を発行した。贈呈用は赤い羽共同募金の支援を受け、その他に市販用を発行した。内容はむくどり公園とむくどりホームの歩み、関係者や参加者から寄せられ言葉、調査報告、むくどりホームだより全号、関連資料、新聞記事等である。Aサイズ256ページ
- (6) 1972年8月, 北海道大学乳幼児臨床教育センターのホールを会場にして開始された。当時、未熟児網膜症による視覚障がい乳児が多く、また盲学校には幼稚部がなかったことから、前東孝儀氏、山崎晃資氏、伊藤則博氏を中心に早期教育として開始された。5年後の1977年に会場が静療院のブレイルームに移り、更に1990年にはのぞみ分校に移り、1995年に終わった。23年間の活動の中で、高橋渉氏、高橋昭氏、大学生、その他多くのボランティアの方々が参加した。筆者は初期に1回と最後の数年間の関わりであり、公園設計コンサルタントが盲児グループを訪問したのは、最後の年であった。
- (7) 公園開園前は月1回1枚のニュースレターを発行していた。その後次第に枚数が増え、3か月に1度の発行となり、2002年12月発行の42号はA4版で16ページである。手書きとワープロの手作りニュースであり、内容は代表者の思い、各教室やイベントその他の活動報告と参加者の感想、3か月の予定表と予告などである。600部をコピー印刷し、遠方で応援してくれている人には郵送し、手渡しは参加者の他、公園周囲の家、藤野第一町内会の回覧板、学校や行政関係に配付している。